

2018年3月28日～30日、国文学研究資料館オリエンテーションルームにて、長塚圭史さんと俳優さんたちによるWSを開催しました。

このWSの趣旨について、長塚さんが以下のように文章を寄せてくださいました。

国文学研究資料館にて様々の古典籍と出逢う。

一冊の古典籍の扱いを元に演劇を立ち上げることはできないのか。

一冊の古典籍からその歴史を辿り、同時にそこに描かれている物語をも立ち上げる。

そのためにはまず古典籍の扱い方。

つまりは読み方を動作として楽しむ。

誇張する。拡大する。

次にその古典籍の巡り合わせ。

例えばAなる黄表紙は、どうして今ここにあるのか。

果たしてどこからこの国文学研究資料館までやってきたのか。

またその間にもこのAは様々な人々の関心を買ったのか、あるいは買わなかったのか。

黄表紙であれば250年ほどの時代を遡ることになる。

Aはいかに出版され、またどういう道を辿って、市井に出回ったのか。

はたまたどう綴じられ、まとめられ、刷られ、彫られ、

絵師に描かれ、版元と渡り合い、また作者によって生み出されたのか。

黄表紙の中でも作者の生みの苦しみを描いた滑稽本がいくつかある。

今回はそれをベースに、実際に俳優を集め、その身体を用いて、

一冊の黄表紙の歴史を追う実験である。

今回参加の俳優

菅原永二、高木稟、八十田勇一

引間文佳、藤間爽子、李千鶴、ほか

- ① 読むという行為の拡大。
- ② 実際に本を作るまでの作業の拡大。

この2点はまずフィジカル（身体的に）に迫りかける。

いくつかの本の形態を実際に扱ってみることから始める。そうして古典籍を知り、その製本の成り立ちを解体してゆく。また読む行為のカノン。

- ③ 1冊の古典籍の歩んできた道のりを辿る。

果たして演劇的にアプローチ出来るか否かは不明であるが、読むという行為をひも解くことで炙り出せるのではないか。またそこに中身とは異なるドラマがあれば（もちろん準じても構わない）、自ずと演劇性を孕んでくるのではないか。

- ④ 作者、絵師のクリエーション。

黄表紙の中でも作者の産みの苦しみを描いたものから、「作者」というキャラクター、そして作者の生み出すキャラクターたちとの関係を探る。そこには絵師によって描かれる、「物語を紡ぐものたち」もあれば、顔のない「式亭三馬」と印字されただけのハンコのような顔の戯作者が登場することもある。こうしたもののフィジカルティ。

- ⑤ 物語の中の登場人物の在り方。

多くの黄表紙、大きく言えば草双紙が歌舞伎と密接な間柄にある。そこに描かれている言葉は歌舞伎によって言語として受け継がれている。落語もまた然り。ではそのようにしかかつての言葉は再現出来ないのだろうか。これは少々話が大きいものだけれど、こうした江戸の言葉の在り方を再構築するというようなこともいずれ出来れば痛快である。多くの先人がこういうことを思いついて、躓いてきたのであらうと思われる。現代風に口語化するだけではない江戸言葉の探究は、あまり焦らず、のんびりと、しかし頭の片隅にはいつも抱いて置きたいものである。それにしてもイタリアの近代演劇の騎手であったノーベル賞作家のルイジ・ピランデッロさながらのメタ構造を持つ作家が江戸の草双紙の世界にこうも在ったことに驚きを隠せない。